

**比較考察：ウェールズと日本の文学に見るヒーロー像**

ウェールズ大学バンゴール校ウェールズ学科

2004年度提出 Mphil 論文の要約

**A Comparative Study: The Literary Construction of Welsh and Japanese  
Heroes in Socio-Cultural Contexts, An Abridged Version of an Mphil Thesis  
for the Year 2004 submitted to the Department of Welsh, University of  
Wales, Bangor.**

藤沢邦子

This is a revised and abridged version of 'A Comparative Study: The Literary Construction of Welsh and Japanese Heroes in Socio-Cultural Contexts' submitted to the Department of Welsh, University of Wales, Bangor, as an Mphil Thesis for the year 2004. Both the similarities and the differences of Welsh and Japanese warrior heroes are discussed in the poetry and courtly traditions of the mediaeval ages. Welsh and Japanese warrior heroes in literature, who 'lived' at times of social instability and transition, share the universal 'hero' characteristics such as courage, integrity and generosity.

Yet, they are peculiarly local, reflecting the respective history, religion, natural environment and cultural tastes. Welsh heroes, such as King Arthur and Owain Glyndwr, are depicted as 'ideal ruler' in poetry as well as prose narratives, some of whom are expected to be 'y mab darogan, or the son of Prophecy' reflecting the national aspiration. Japanese heroes, such as Yamato Takeru and Minamoto Yoshitsune, tend to appear as 'the son of Fate' as well as 'the Nobility of the Defeated' in *Kojiki, Records of Ancient Matters* and *The Tale of the Heike*, reflecting world views and aestheticism of the Japanese.

Key Words: hero, fate, prophecy, poetry, court culture

Kuniko Fujisawa

### はじめに：背景事情

表題論文についての 2005 年 4 月の口頭試問。学内審査員の Dr. Branwen Javis (前ウェールズ学科長)、Dr. Jason W. Davies (現代詩の講師。2004 年度の Eisteddfod においてクラウン) と、学外審査員の Dr. Rhiannon Andrews (クイーンズ大学) から「おめでとう、合格です」と言われた瞬間を、私は生涯忘れないだろう。高年アマチュアの好奇心を受けとめ、柔軟に熱心に指導してくださった先生がたに感謝の気持ちで一杯だった。

比較という手法を選んだのはいくつかの理由による。第一に、ウェールズ独特の「予言の息子」に強い関心があり、それを短期間に研究するには、少しは知っている日本のヒーローとの対比が適切な出発点に思われた。第二に、翻訳業および国際親善奨学生という立場から、ウェールズ文化を学びつつ、自分なりに日本文化の一端を発信できたという願いがあったからである。この点では、指導教官の Dr. Jerry Hunter が学際的探究心あふれる米国人という幸運に恵まれた。<sup>i</sup> 先生はナショナリスティックな傾向のあるウェールズに「外からの視点」を持ち込むことは有意義とし、「主要文献に即した具体的な、かつ創造的な論文を」と激励してくださった(しかし、日本文化や文学に通じた——少なくとも興味を持つ——審査員を探すという苦勞を大学側に強いたようである。それだけに、口頭試問の後半で日本の詩歌についての質問が続いたときは、嬉しい驚きを覚えた)。第三に、国際ケルト学会(2003 年アベラストウイス)に参加して多様な視点やアプローチを見聞したことも、比較手法への追い風になった。こうして、拙論の 'A Comparative Study: The Literary Construction of Welsh and Japanese Heroes in Socio-Cultural Contexts' ができ上がった。問題は私がウェールズ語の資料が読めないこと、審査員が日本語の資料が読めないことで、参考文献が英訳のあるものに偏りがちになった。また、書くほどに、日本文学についていかに無知かを痛感し、恥じ入った次第である。

### 要約の構成について

ここでは表題論文を、1. 彼我のヒーローの特徴を社会文化史的に考察し、2. ヒーロー像の形成に関わった文学伝統(特に詩)を中心に要約し、若干の加筆修正

も行なった。

ユーラシア大陸を隔てることはるか、ウェールズと日本は、民族、宗教、歴史、風土、言語などまるで異なる。にもかかわらず、社会や文化の文脈において両者に興味深い類似を見いだせる。島国の成り立ち（それ故の辺境性）、黎明期の大陸文化の大きな影響（ローマとキリスト教、中国と儒教、中韓を経たインド仏教）と土着の文化（ケルトの神々と日本の神話<sup>ii</sup>）、これら外来と固有のものとのシンクレティズム、民族や伝統への誇りと愛着（それ故の保守性と偏狭性）、宮廷文化と詩人や吟遊する語部の活躍、行動美学である騎士道と武士道<sup>iii</sup>、古代から現代までの詩歌への愛好（芸術レベルと生活レベルで楽しまれ、アイステツズヴォッドや歌会始が今なお盛況）、修道院と僧院の果たした役割（写本や翻訳を行なって大陸文化との接点となり、教育に寄与し、宗教活動に伴う音楽や美術を生んだ）など、平行するものが多い。ウェールズ文学や日本文学のもつ独自性や普遍性にも拘らず、マイナーな言語および内向きな国民性のためか、国外であまり知られていないところも共通する。

こうして似て非なる諸事情を背景として、異なる価値観や美意識が醸成され、それぞれの国民が期待するヒーローが誕生し、文学や伝説で語り継がれ、これからも生き続けるだろう。

ヒーローの定義は時代により、国情や社会により、また個人により様々である。オックスフォード英語辞典は広義なヒーローを“a man who exhibits extraordinary bravery, firmness, fortitude, or greatness of soul, in any course of action, or in connection with any pursuit, work, or enterprise; a man of admired and venerated for his achievements and noble qualities”としている。これを世界古今の英雄詩、叙事文学、伝説などに限ると、高貴な生まれ、武勇にすぐれ、信義を奉じ、忠誠と名誉を重んじ、死を恐れない伝統的なヒーロー像が浮かび上がる。今日、こうした価値観のあるものは問い直され、無名の庶民のヒーロー、アンチヒーローという考え方も存在する。

論文では、ウェールズと日本の文学伝統にみる戦士ヒーロー（warrior hero）に注目した。<sup>iv</sup> ウェールズ側は、『マビノギオン The Mabinogion』や『ゴドジン Gododdin』の登場人物、そして頌歌（praise-poetry, eulogy, panegyric）や悲歌（elegy）で称賛された歴史上のプリンス、さらに予言詩と深くかかわるアーサー王やオワイン・グリンドゥールについて考察した。日本側は『古事記』や『平家物語』で語られる、倭建と源義経を中心にヒーロー像を探った。時代の空気、宮廷歌人の役割、宮廷文化、美意識などを窺い知るために、天皇や貴人への寿歌や挽歌その他を収める『万葉集』、日本の詩すなわち和歌を確立した『古今集』も参照した。

万国の戦士ヒーローが共有する普遍的な特徴（Cambell, J. 1988; Vries, Jan de, 1963; Bowra, C. M., 1964; Hatto, A. T., 1980. これらは世界の神話、英雄文学を通して、英雄エトスを論考している）に加えて、ウェールズには「理想の為政者」にして「予言の息子 *y mab darogan*」の伝統があり、日本には「運命の息子」とでも呼ぶべき「美しく滅びた者」への強い共感がある。前者はきわめて政治的・現実

的でありながら、ケルト的な神秘主義に包まれている。後者は悲運を従容と受け入れ、その生き方（死に方）には日本の美意識<sup>v</sup>が反映されている。風土もヒーローの資質に影響する。狩猟・牧畜民族のヒーローは熊やライオンや鷲といった動物シンボリズムに彩られ男性的であるのに対し、わが農耕民族のヒーローは風貌とメンタリティにおいて植物的な<sup>vi</sup>受動性および女性的ともいえる優美さをもつ。多くの図像において、アーサーもグリンドゥールも体躯堂々、髭を蓄え、重い金属の鎧を着ている。古代ケルト戦士像としては「瀕死のガリア人」（紀元前3-2世紀）やヒルシュランデンの石像（ハルシュタット期）があり、ともに裸体でトルク（首環）を身につけている。一方、『古事記』でも、ますらをぶりの『万葉集』でも、『平家物語』でも、戦士が泣くシーンが多々ある。倭建は白鳥になって天翔ける、義経は八艘跳びをするなど、彼らは若さや軽やかさや華麗さを身上とする（むろん、田力男命や坂田金時のような肉体派ヒーローもいないわけではない）。さらに社会制度もヒーローの資質に影響するようだ。倭建や義経は悲憤慷慨することはあっても、強く自己主張することはない。ウェールズのヒーローに比べ主体的でないと言えよう。これは自らの分（環境・運命）や社会規範への順応と関係するのではないだろうか。アーサーとオワイン・グリンドゥールは大領主であり、自らの戦士団を抱え、雄弁であり<sup>vii</sup>、自らの決断で行動した。これに対し、倭建は父帝から少数の供を与えられただけで（しかも文面にみる限り、騎馬ではなく徒歩の行軍である）、義経は上皇あるいは將軍の命令で頼朝の軍勢を率いるのみだった。二人とも自らの王宮・居城はもとより家来に与える領土を持たず、客地に死んだ。

倭建は死の直前に帝に次のような書を送っている。

Your servant at your bidding penetrated the distant eastern Wilds,  
 ... I die alone on the empty moor. I regret not the losing of this body;  
 I regret only that I may not come to you. (Wheeler, 1952:185)<sup>viii</sup>

義経は自分の行動を「[鎌倉殿の]御代官のそのひとつに選ばれ、勅宣の御使として朝敵を傾（かたぶ）け、累代の弓矢の芸（わざ）をあらはし、会稽の恥辱をきよむ」（巻十二、腰越）と説明している。

## 1 ヒーロー像

### 1-1 ウェールズ：予言の息子

ケルトの予言はドルイドの昔から呪術として存在したと考えられており、それらについて古代ギリシャ人やローマ人による記述が残っている（Koch, J.T., 1994:Part I）。6世紀の歴史的タリエシンやマルジンのように予言者だったとされる詩人もいる（初期の予言詩については Parry, T., 1955:26-33.）。マルジンは、12世紀に、モンマスのジェフリーにより魔法使いメルリヌスまたはマーリンとして再生された。13世紀のウェールズのジェラルドは、トランス状態で占いをする詩人（*awenydd*）を目撃した（Thorpe, 1978:246）。予言詩（*canu brud*）は宮廷での正統的なものではなかったが、大きな影響力を持ちつつ15世紀まで存続した。主題と語句はほぼ一貫しており、辛い現在を嘆きつつ、「赤いドラゴン（ブリテン）が白いドラゴンに勝つ」（*Historia Brittonum*）、「ケルト諸族の結束でアングロサ

クソンをブリテン島から追い出す」(*Armes Prydein*) といった未来を予言する。悲願の先頭に立つのが予言の息子で、アーサーやグリンドゥールの他に Hiriell, Cynan, Cadwallon, Cadwaladr, Owain Lawgoch, William Herbert, Henry Tudor らがいた。征服された民族にとって、予言詩は栄光の過去への誇りと未来への希望を与える政治的イデオロギーであり、ウェールズ民間口承文化の重要部分を占めていた (Williams, G., 1979:71)。<sup>ix</sup>

ジェフリーの『ブリタニア列王史 *Historia Regum Britanniae*』によれば、トロイの英雄アエネアスの孫ブルートウス (*Brut*) は、女神ダイアナの夢のお告げでブリテン島 (*Ynys Prydein*) にやって来た。彼は巨人を退治し、王となってロンドンに都を築き、国法を定め、平和に治めた (Thorpe, 1976:54-75)。この時間的・地理的に壮大なブリテン神話がウェールズ人の集合的記憶となり、Roman-Britons としての強固なアイデンティティの元となった (Lynch, P., 2000:181-2)。この神話はパクス・ロマーナ (Sims-Williams, P., 1983) への、またローマによる文明化と繁栄 (Davies, J., 1993:26-43) への思慕 (*hiraeth*) と平行するかもしれない。その誇り高きブリトン人が他民族による征服や圧政を経験すれば、黄金の夏に喩えられる「過去の栄光」の回復を願うのは必然と言えよう。国民的ヒーローのアーサー (6世紀?) やオワイン・グリンドゥール (1354—c.1416) は、ヨーロッパ諸国のヒーローと英雄気質を共有するに止まらず、時がくれば眠りから覚めてブリテンの主権を取り戻す救国ヒーロー (national redeemer) なのである (Henken, E.R., 1996)。

年代記『ブリトン人の歴史 *Historia Brittonum*』は、アーサーの12の勝利を記している。ウェールズ文学史における英雄の時代 (c.450—c.600) の理想——*courage in war, generosity in peace*——を具えたアーサーは、『ゴドジン』では勇者の範として言及されている。しかし彼は、歴史上の一人物というより、異教徒アングロサクソンと戦った複数の戦士隊長 (*dux bellorum*) が合体されたヒーローである。そのためか、三題歌や聖人伝には好戦的で傲慢なアーサーがおり (Coe, J. B. and Young, S., 1995)、『マビノギオン』だけでも、不思議 (*anoeth*) を求めて異界に遠征するケルト的戦士から、共同体を富まし外敵・災禍 (*gormes*) から守る土俗的な首長、そして理想的なキリスト教君主まで、多様なアーサーが登場する。彼について予言めく言及は「墓の詩 *Englynion y Beddeu*」が最初である。アーサーの墓は謎だとするこの詩は、彼の生存伝説を長く支えてきた。『タリエシンの書 *Llyfr Taliesin*』の「木々の闘い *Cad Goddeu*」の最後にも、文脈や正確な意味は不明だが、*Druids, wise one, prophecy to Arthur* という1行がある (Ford, Patrick, 1977:187)。彼を明確な「予言の息子」にしたのはモンマスのジェフリーで (同時に「ウェールズのアーサー」を全ヨーロッパ的英雄に仕立てた)、傷ついたアーサーはりんごの島 (*Ynys Afallon*) で再来の時を待つことになった。彼が眠る洞穴の民話はウェールズ各地に残っている。

グリンドゥール (父方はパウイスの、母方はデハイバルスの王家の末裔) は、豊かで文化的な生活を享受するウェールズ貴族 (*uchelwr*) であったが、なによりも

自分を軍事的リーダー (*cannwyll brwydr*) とみなしていたという (Davies, R.R., 1997:77)。彼はロンドンで法律を学び、イングランド王のバロンとして宮廷にも出入りしていた。しかし時代は激動期、しかもウェールズ全土にイングランドへの不満が鬱積していた。グリンドゥールはイオロ・ゴッホの詩で「ウェールズの唯一の首長 (*un pen ar Gymru*)」と称えられ、同時代の少なからぬ予言詩で暗示をかけられていたが、プリンス・オブ・ウェールズを名乗って決起したのは1400年、40歳の時である。土地係争でのイングランド議会の不正義と侮辱<sup>x</sup>が直接の引き金だが、今日では熟慮した末の賭けと解されている。<sup>xi</sup> 彼はブルトウスの3人の息子がウェールズ・スコットランド・イングランドを分割統治したというブリテン神話から説き起こして自らの正当性を訴えた。また『ブリテンの予言 *Armes Prydein*』を引いてケルトの同盟をスコットランド王とアイルランド貴族に呼びかけ、オワイン・ローゴッホ (c.1330-78) の後継者としてフランス王に援軍を求め (短期だが実現)、アヴィニヨンの教皇に支持を求めるなど外交手腕を発揮した。「栄光の過去」に、議会、独立した教会、大学という未来的ビジョンを加えたのも彼であり、歴史家ロイドはグリンドゥールを「近代ウェルッシュ・ナショナリズムの父」と呼んでいる (Lloyd, J.E., 1931:146)。<sup>xii</sup> こうした史実とは別に、変装して敵を欺く、危機一髪の脱出、姦計を見破り懲らしめる、山野をかけめぐり嵐をよぶ、といった逸話にもこと欠かず、敵にも味方にも超自然的な力をもつ人と信じられるようになった。シェークスピアの『ヘンリー四世』で、グリンドゥールは言う。

...at my birth

The front of heaven was full of fiery shapes,  
The goats ran from the mountains, and the herds  
Were strangely clamorous to the frightened fields.  
These signs have marked me extraordinary,  
and all the courses of my life do show  
I am not in the roll of living men.

(First Part of King Henry IV, Act III, Scene I)

ヘンリー四世率いる大軍との攻防からゲリラ戦までの華々しい戦いにも拘わらず敗れたグリンドゥールは、霧に包まれた山に消える。各地にグリンドゥールに関わる共同体の記憶 (*cof gwlad*) を残し、その神話的大きさはアーサーに匹敵する。きわめて異例なことに、彼の死を悼む悲歌は残っていない。詩が戦火で焼けたからではなく、詩人が勝者イングランド王に阿ったからでもなく、民衆が少なからぬ戦禍と荒廃をひどく恨んだからでもない。詩人はグリンドゥールの死を認めるような悲歌や鎮魂歌をあえて作らず、ウェールズ人の多くは (イングランド人年代記作者が彼をどう描こうと) 彼の再来を望んだのであろう。16世紀前半、ウェールズ人年代記作者エリス・グリフィッツは伝承に基づき、「グリンドゥールは来るのが100年早かったと悟って山の洞穴に潜んだ」 (Henken, E.R., 1996:73) と記している。

「最後の予言の息子」ヘンリー・テューダーは、予言詩をたくみに利用し (信じ

でもいただろう)、ドラゴン旗を掲げ、長男をアーサーと名づけ、グリンドゥールの進軍路を辿った。1485年、彼がヘンリー七世としてテューダー王朝を築いたとき、ウェールズ人はこれを「グリンドゥールの遅まきの勝利」(Williams, Glanmor, 1993:60)と喜んだ。

ウェールズとイングランドの両方において、予言がいかに現実味を帯びていたかを付記しておきたい。ヘンリー二世は1165年に、「アーサーの死を確認するため」グラストンベリー修道院の墓を掘り返した。1278年、エドワード一世はスイウェリン二世 (*Y Llyw Olaf*) の首をロンドンで引き回して、彼が「次なる予言の息子」にならないよう喧伝した。イングランド王は予言詩をたびたび禁じており、これは予言の伝統を揶揄しながらも危険視していたことを物語る。オワイン・ローゴッホはフランス王に仕える傭兵隊長であった。ウェールズ王家の血を引くローゴッホが予言の詩句どおり「海のかなたから」帰還することを恐れ、イングランド王は刺客を送って彼を殺害した (Carr, A.D., 1991)。中世ヨーロッパ諸国の予言詩にはキリスト教のメシア再来説や千年至福説が与っているが、ウェールズの場合はかなり民族色が濃く、ヒーローによる宗教的救済、聖地奪還、社会改革という側面は薄いようである。

ヘンリー・テューダーがブリテン神話にいう「ロンドンの王冠」を戴いたとき、予言は実現したわけだが、アーサーやグリンドゥールは20世紀になっても危機が生じるたび、詩歌の中に蘇り、ウェールズ人を励ます。

ウェールズの未来 (*Cymru Fydd*) 運動が危機に瀕していたとき、T. Gwyn Jones は「去り行くアーサー *Ymadawiad Arthur*」で、アーサーにこう語らせている。

I go now to the halcyon summer  
Of Avalon to be healed,  
But I shall return to my land,  
I shall lead it to victory,  
When the time comes, and the day  
Of its fame amongst countries . . . . .  
And the Day will come at last  
And my bell will ring, my sword  
I shall grip, I shall bring back  
Honour to our country and language. (Jones, B.L., 1975:93)

歌手 Dafydd Iwan (1943-) は、ウェールズ語の危機に際し、古い予言詩を援用して、次のような歌を作詞・作曲。自ら力強く歌って、時代の応援歌とした。

Oh! I know Owain will come back,  
Like high tide after ebb,  
Like a rainbow after the rain,  
Like a dawn after the night,  
By God, I know he will come. (Henken, E.R., 1996:180)

彼らは今なお、民衆のために戻ってくることを期待される救国ヒーローなのである。

## 1-2 日本：運命の息子

これに対して、日本の「運命の息子」は、散る桜に喩えられる「美しく滅びた者」への詠嘆と愛惜の対象であることが多い。判官最良はこの日本人のメンタリティの最たるものといえよう。Ivan Morris は日本のヒーロー達（倭建、義経、楠正成、天草四郎、西郷隆盛ら）を「高貴なる敗北者」と捉える (Morris, I., 1975)。偉人や成功者は必ずしもヒーローとみなされない。一途に潔く悲運に殉じた者が、いかに欠点があろうとも、国民的共感を勝ちとるようだ。そしてヒーロー自身が運命を強く意識している。Wheeler 訳の『古事記』では、倭建が “my preordained life is suddenly ending” と言う。上代の神話でありながら、『古事記』が編纂された 712 年には仏教も浸透していたので、ここには倭建の宿命観がみてとれる。書簡において義経は「骨肉同胞の義を絶す。すでに宿運きはまるどころか。はたまた前世の業因の悲しきかな」(巻十一、腰越) と嘆く。

幼い安徳天皇は「先世の十善戒行の御力によって、いま万乗の主と生まれさせたまへど、悪縁にひかれて、御運すでにつきさせ給ひぬ」(巻十一、先帝身投) と二位の尼に説かれる。

洋の東西を問わず、戦士ヒーローにとっての関心事は名誉と忠誠であり、そのために命を賭けて戦うことが彼らの存在理由であった。それゆえ、「ゴドジンのヒーロー達は笑いながら運命に向かって馬を駆った」(Williams, I., 1935:5)。ただし、キリスト教では自殺は許されず、また西欧では戦争で捕虜になることは不名誉なことではなく、武術試合でも慈悲を請うことができた。日本では虜囚の辱めを受けるべきではなく、敗軍の将兵は自死を遂げることが良しとされた。神道は先祖に不名誉をもたらすなど教え、仏教は再生と無私を教え、儒教は忠孝と自己犠牲を教え、それらが相乗して自死への心理的正当化を助けたかもしれない(本来それぞれが現世の幸せや平安を説いていたはずだが)。避けられない運命を前に、美しい最期、名誉の死がいっそう重要になる。平敦盛は戦いの前夜、陣中で笛を吹き(巻九、敦盛最期)、荒法師弁慶でさえ最後の戦いにおいて敵前で舞っている(『義経記』、巻第八)。

平家の勇将知盛はこう下知した。

いくさは今日ぞかぎり、者どもすこしも退く心あるべからず。

天竺、震胆にも日本我朝にもならびなき名将勇士といへども、

運命尽きぬれば力およばず。されども名こそ惜しけれ。

東国の者共によわけ見ゆな。いつのために命をば惜しむべき。

(巻十一、鶏合・壇浦合戦)

そして御座船に行き、「見苦しからむ物共、みな海へ入れさせ給へ」(巻十一、先帝身投) と言って、自ら船を掃き清めた。物心ともに美しい最期をとの気概がうかがえる。「見るべきものは見はてつ」と言って悠揚と海に入った知盛は、栄枯盛衰の一切すなわち「運命を見た」のであろう(巻十一、内侍所都入)。

義仲の乳母子は「弓矢とりは年頃日頃いかなる高名候へども、最後の時不覚しつ



れば、ながき疵にて候なり」と主君に自害をすすめた（巻九、木曾最期）。

戦士の名誉と死の捉え方について、さらに見てみよう。

那須与一は神仏に「射損ずるほどならば、弓切り折り、海に沈み、大龍の眷属となって長く武士の仇とならんずるなり。弓矢の名をあげ、いま一度本国へ迎へんとおぼしめされ候はば、扇のまん中射させて賜はり候へ」（巻十一、扇の的）と祈念する。恥をかいたら死ぬだけでなく、「崇る」と悲壮ですさまじい。

義経は、海戦のただなか海に落ちた自分の弓を家来の制止も聞かずに拾い、言った。「弓を惜しむにあらず。叔父八郎為朝が弓なんどなりせば、わざとも浮べて見すべけれども、厄弱（おうじゃく）たる弓を平家にとって、『これこそ源氏の大將の弓。強いぞ弱いぞ』と、あざけられんが口惜しければ、命に代えて取ったるぞかし」（巻十一、弓流し）。自己基準からも外聞からも、恥（名誉）と死は不可分だった。

倭建は、兄を殺すほど猛々しいが女装して熊襲を惑わすほど美しく、都に妃がありながら行く先々の媛と愛を交わす。<sup>xiii</sup> 父帝の愛が薄いことに泣くかと思えば、出雲建を謀って討つ。地方神を侮蔑してその罰で正気を失うかと思えば、功ある者をとり立てて国造りを進めている。さらに倭建は連歌の始祖とされ（河野伸江:8）、短歌の始祖とされる荒ぶる神須佐之男（『古今集』仮名序、『平家物語』巻二、卒塔婆流し）に負けない文化ヒーローでもある。『古事記』のヒーロー達はきわめて多面的で、ギリシャ・ローマの神々のように人間くさく、支配者になった人間が神格化されていったことが窺われる。これに対し、『マビノギオン』のヒーロー達は失われたケルトの神々の記憶であったという（Davies, J., 1993:37; Mac Cana, P., 1975）。しかし物語は12世紀に書きとめられたため、キリスト教的な色彩を帯び、中世社会が反映されている。<sup>xiv</sup>

義経は（1159-1189）は戦術家にして闘将、はかなく輝かしい生涯を送った。天狗に武術・兵法を伝授されたといい、情けあるもののふとして同時代人に愛され、逃避行での逸話を各地に残した。多くの美女に慕われたこの笛の名手は、都育ちの雅びさを持つ美丈夫でもある（ただし、『義経記』では美形だが、『平家』巻十一では「色白う、せいちいさきが、むかばのことにさしいで」とある）。その栄光と没落の物語は、時代が下るにつれ変容し、伝説化した。義経は武家による初の年代記『吾妻鏡（東鑑）』に記されているだけでなく、『平家物語』で語られ、幸若舞で舞われ、軍記物語や御伽草紙で読まれ、華麗な絵巻物に描かれた。後の能・狂言・歌舞伎・文楽・小説からテレビドラマまで、彼は生き続けている。しかしどの時代においても、日本人の彼への思いはあくまで愛惜だ。芭蕉が高館を訪ねたときの「夏草や つわものどもの 夢のあと」も、義経主従あるいは藤原一族への鎮魂歌である。

上に見てきたように運命の息子たちは「運命」を疑わない。彼らにとって運命は人間の力で変えられない前世からの定めだが、ウェールズの運命という概念はすこし違うかもしれない。Rowland, J. (1990:23-38) によれば、運命は神の下にあるも

の、無用の死は知恵や節度によって軽減しうるという考えが、ウェールズの諺や詩に見られるという。<sup>xv</sup> 『老サワルフの歌 *Canu Llywarch Hen*』において、サワルフは息子たちの死という運命 (*tynged*) は避けられたかもしれないと考えている。彼は、名声を強いた自分の頑迷さが逃げるか留まるかの判断を息子から奪い、徒死に追いやったのではないかと悔やんでいる。『ヘレーズの歌 *Canu Heledd*』では、王女ヘレーズは自分の過剰なプライドや傲慢さがパウイス王国を灰燼に帰したと嘆いている。<sup>xvi</sup>

ウェールズ戦士についてのジェラルドの観察もまた興味深い。「彼らはベッドで死ぬことを恥とし、国土の自由と防衛のために戦場で死ぬことを名誉と考えていた。だが、彼らは臆面もなく逃げることもある、立ち直って明日出直すために。ウェールズ征服はたやすいことではない(要約、藤沢)」(Thorpe, 1978:233 および 260)。独立国家を目指した知将グリンドウールの 15 年に及ぶゲリラ戦を予言しているかにさえ思える。

日本に「予言の息子」が生まれなかつたのはなぜか？ 第一に予言の息子を必要とする状況がなかつた。倭建の白鳥伝説や義経のジンギスカン伝説は、その死を信じたくない大衆の気持ちの表れであろう。しかしそこには、ウェールズにおけるような帰還への願望はない。武士道の仇討ちは家族や藩という所属集団のためであり、源平の争いも国内の覇権争いであり、外敵を倒して国の主権を取り戻すという意味合いはない。第二に、輪廻転生という考えはあってもメシア再来思想はなかつた。代わりに、人は死して祖霊に昇華するという神道思想があり、農耕民族にはすべてを水に流すような淡白さがある。さらに、因果応報という仏教思想があつて、それは古来からの怨霊への畏怖にも通じた。倭建や義経や平家武者の蘇りは、必ずしも歓迎すべきものではなかつた。<sup>xvii</sup> 第三に、終末論に似た末法思想はあつたが、前者がその後に千年至福という明るい展望をもつのに対し、後者はもっぱら悲観的な無力感をもたらした。一揆などで世直しヒーローを「現在」期待することはあつても、「未来」に予言の息子を期待するという発想は日本にはなかつたと言えよう。

<sup>xviii</sup>

## 2 詩の伝統

### 2. 1 ウェールズの詩人

ウェールズ国歌「わが祖先の古き土地 *Hen Wlad Fy Nhadau*」にあるように、ウェールズは「詩人と楽人の国 *Gwlad beirdd a chantorion*」である。<sup>xix</sup> そのアイデンティティは詩の伝統によって保たれてきたと言われ (Humphreys, E., 1989)、それを担った詩人 (*bardd*) は階層化されてはいたが一般に社会的地位は高く、トップの「宮廷お抱え詩人 *bardd teulu*」や「詩人の長 *pencerdd*」の権利や義務は古くから法律書 (*Cyfraith Hywel*) で定められていた (Lewis, C. 1992:134)、ギルド的な組織のなかで詩の教育が口伝で行われた。最も重要なのが頌歌であり、その中で戦士エトスあるいはヒーロー像が作られていった。タリエシンは主君イリエンを 'land's defender, battle-winning lord, cattle-raider, feeder of wolves' と勇猛さを称え、'He slays, he hangs, supplies, provides' と強くて気前のよい首長とし

ている (Clancy, J.P., 2003:39-41)。戦場のトポスには 'torn flesh, men stained with blood', 'By fighting they made women widows, Many a mother with her tear on her eyelid' などと生々しいリアリズムが見られる。当時の詩人たちは独創性よりも伝統を重視したので、後代の詩や物語でも、戦士ヒーローについて似たような語句や表現が繰り返されている。とはいえ、英雄時代から騎士道時代へと進むにつれ、キリスト教の影響が増し、ヒーローの具えるべき美德や資質も少しずつ変わっていく (Matonis, T.E., 1978)。14 世紀初めの成立とされるルールブック *Gramadegau'r Penceirddiaid* (Williams, G.J., 1934) には、王や聖職者や婦人を含む貴族のいかなる美德をいかに称賛すべきかが詳細に定められている。<sup>xx</sup> その結果、グリンドゥールは、戦士として 'Lion. . . which does damage to a host, feeding the crows', 'the candle of battle' と謳われる以上に、為政者として 'wise and witty', 'humble and gentle to the weak' と称えられている (Johnston, D., 1993:30-32)。詩人らはこうした詩作法はもとより、歴史、法、系図、物語などの伝承に通曉していた専門職能集団であったから、「インド・ヨーロッパに共通する詩人の理想に基づき、王権の判定者と自負し、その詩は統治者の威信および臣民の安寧の安全弁として機能した」(McKenna, C.A., 1991:4-5) という。公的使命と影響力をよく自覚しており、詩人はパトロンである主君をただ賛美するだけでなく、王や貴族を「理想の為政者」と称えることにより、彼らをその範疇にはめることもできた。詩人と主君とが相互依存の関係にあったと言ってよいだろう。ブリディズは「I made fame for thee」(Lewis, C.W., 1992:129) と豪語し、カンズルウは「Without me you would be unable to utter / And I, [likewise] would be unable to utter without you.」(Lynch, P., 2000:172) と歌っている。為政者があるべき姿から逸脱すると、甘い頌歌は苦い風刺、脅し、呪いにも転じた。好例が「ダヴィーズへの警告 *Bygwth Dafydd*」や「グリフィーズ・ヴァブ・カナンへの警告 *Bygwth Gruffudd fab Cynan*」(同上) である。詩が社会的芸術であった時代においては、予言詩は政治的プロパガンダになりえた。例えば、詩人は移動の自由を与えられていたので、グリンドゥールの決起をいち早くウェールズ全土に伝え、支持を訴えたのも吟遊詩人であった (Skidmore, I., 1980:32)。

ウェールズは古くから戦士貴族社会であり、王の近衛兵団 (*teulu*) のエリート戦士はメーズ (*medd*) に象徴される厚遇を受け、その返礼として王に死をも辞さない忠誠を誓った。ゴドジンの戦士たちも黄金のトルクをつけて宮廷大広間の饗宴に連なった。詩人の第一の義務は、頌歌において主君の善政やヒーローの武勲をたたえること。第二の義務は、『マビノギオン』のグイディヨンのように物語を語り、人々を楽しませること。そして戦時には、詩人は「ブリテンの主権 *Unbeiniaeth Prydein*」を朗読して、士気を鼓舞した。(Jenkins, D., 2000:142-166)。

『ゴドジン』の作者アネイリンの詩句から察するに、彼は戦士団に従軍してからも生還し、その負け戦で死んだ同胞について物語っている。(Jarman, A.O.H., 1990:2 および 74)。亡きヒーローを偲ぶ悲歌はまた生き残った者への遺訓であり、反撃の糧となったに違いない。そしてアネイリンが「The poets of the world judged

him to be of manly heart.」(同上:18)、「Hyfaidd Hir will be praised while there a minstrel.」(同上:6)と詠じたとおり、ヒーロー像を作りその名を後代に伝えるのも、詩人や語部であった。

## 2. 2 日本の詩人

ウェールズと違って、日本は4世紀から天皇を頂点とする文人貴族社会であり、<sup>xxi</sup> 550年頃から1500年頃まで、宮廷詩は文芸の中心であった(Miner, E., 1968:1)。<sup>xxii</sup> その担い手である読み人の中には女性を含めた皇族や貴族が多数いたので、「宮廷詩人」がどのように専門職だったかは、研究者のあいだで未だに議論されている(例えば、野田浩子『国文学』(1981年9月)の「詞人、宮廷歌人論」、『岩波講座：日本文学史』1巻(1995)の「万葉の歌人たち」)。ともあれ、『万葉集』の歌人らは、命により雑歌(天皇の治世を寿ぐ歌、宮廷行事や行幸での歌、羈旅歌、宴席などでの歌)、相聞、挽歌などを詠作し、また古今東西の歌を撰録した。彼らはいわば官僚芸術家であり、ウェールズの詩人のように社会的責任の自覚があったとは思われない。しかし、読み人の階層の厚さ(天皇から防人や遊女まで)や地域的広がりやテーマの多様性(例えば、巻五・山上億良「貧窮問答歌」:802-803)を考えると、詠作・代作であれ選録であれ、詩人たちは社会の記録者として機能していたと言えよう。やがて社交遊戯的に始まった歌合せが文学的色彩を強めると、宮廷詩人は優劣を審判する判者をつとめ、批評意識や歌論の発展にも貢献することになった。集まって歌を作ったり競ったりという意味で、宮廷は詩という言葉の饗宴の場でもあった(大岡信、1987:65-69)。漢詩文が主流の唐風賛美の8-9世紀を経て、905年、最初の勅撰和歌集『古今集』が編纂された。かなの普及による国風文化の復興であり、その仮名序で紀貫之は、こう記している。

和歌(やまとうた)は、人の心を種として、万(よろず)の言の葉とぞなれりける。・・・花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地(あめつち)を動かし、目にみえぬ鬼神をもあはれと思はせ、男(をとこ)女のなかをもやはらげ、猛き武士(もののふ)の心をもなぐさむるは、歌なる。

(佐伯梅友校注『古今和歌集』仮名序、2004:9-22)

大岡信はここに、日本の詩の特質や日本人の思想における自然性原理が示されていると指摘する(『大岡信著作集8』1977:82-114)。貫之のこの詩論は、Keene, D. (1987: 22-23)によれば、超自然的な存在がその靈感(muse)に動かされた詩人を通して語るという西欧の考え方と大きく異なる。ウェールズの詩人も詩神に靈感を与えてほしいと祈る。

Miner, E., (1968:1-17) は日本の中世詩の二大特徴を雅(courtly beauty)と風流(elegance)と捉え、西欧の文学が行動・思想・道徳的責任への信念——社会性——をもつものに対し、日本文学は自然(花鳥風月)への感懐や観照を強調する。おのずと主題は抒情的・私的なものになり、加えて和歌は詩形がきわめて短かい。そのた

め日本には英雄「叙事詩」が存在しにくく、戦士ヒーローは『平家物語』や『太平記』などの詩的散文で語られた。しかし、『万葉集』の長歌には英雄詩とみてよいものがあり、<sup>xxiii</sup> 次に挙げる防人の歌には、素朴な古代戦士のエトスが感じられる。

畏（かしこ）きや。命（みこと）被（かがふ）り 明日ゆりや  
草（かえ）が共寝む。妹なしにして（巻二十）

今日よりは 顧みなくて 大君の

醜（しこ）の御楯（みたて）と 出で立つ我は（同上）

中世の戦士エトスは、封建制度の下での弓馬の道である。

弓馬（きうば）の家に生まれ来て、命（めい）を頼朝に奉り、  
かばねを西海の波に沈め、山野海岸に起き臥し明す武士（もののふ）乃、  
鎧の袖枕片敷く隙（ひま）も波の上。  
ある時ハ船に浮かみ、風波に身を任せ、  
ある時ハ山背（さんせき）の、馬蹄も見えぬ雪の中（うち）に・・・

（能『安宅』）

こうした封建制での戦死エトスは名誉や功名への報いに深くかかわる。<sup>xxiv</sup> 義経と瀕死の郎党とのやりとりには、同時代人が理想とした主従関係が投影されている。

弓矢取る者の敵矢に当たって死ぬるは覚悟の前、ことにも「源平の戦に奥州の佐藤三郎兵衛嗣信という者が・・・主君の御命に変わって討たれた」と、末代までの物語にされることは、今生の面目、冥途の思い出、これに上越す誉はございませぬ」心猛き判官も鎧の袖に涙をしばりながら、・・・一人の僧を招いて「手負うて死んだこの者のために、一日経を書いて、弔っていただきたい」と頼み、たくましく肥えた黒馬に、りっぱな鞍をおいてその僧に賜った。（河出版『平家物語』、1967:247）

しかし散文においても、詩の重要さは顕著である。『古事記』には、倭建の恋歌・連歌・望郷歌だけでなく神々や天皇の歌もあり、110首の形も長さもさまざまな歌謡が含まれる。<sup>xxv</sup> 『源氏物語』は実に800余の和歌で彩られている。

室町時代に書かれた『義経記』では、義経は逃避行のつれづれに正妻と歌を交わし、弁慶と辞世の句を交換している（巻第八）。当時の美意識では、義経は強く優しく雅びでなければならなかったようだ。

『平家物語』の平忠度の言葉からは、詩による永遠の名声という価値観が伝わってくる。

選集（せんじふ）のあるべきよし、承り候ひしかば、「生涯の面目に、一首の御恩をかうむり候はばや」と存じ候ふところに、やがて世の乱れ出で来て、その沙汰もなく候ひしことども、一身のなげきと存じ候。.....世しづまりなば、さだめて勅撰の沙汰候はんずらん。そのうちに一首御恩をかうむり、草のかけまでも「うれし」と存じ候はばや。

（巻七、忠度都落）

忠度を討ち取ったという勝ち名乗りを聞いて、敵も味方も「あないとほし。武芸

にも歌道にも達者にておはしつる人を」と「涙をながし袖をぬらさぬはなかりけり」と惜しんだ。(巻九、忠度最期)もし彼が捕虜になったら反応は違っていたらろう。『平家物語』は和漢混交体の散文だが、随所に七五調リズムの混じる語りである。軍記物語であるから残酷で悲惨な場面は予期されるどころだが、戦場のトポスでさえ血なまぐささより抑制された詩情がある。ウェールズの戦場トポスに見られるリアリズムと激しい詩情とは対照的である。

海には赤旗、赤印、投げ捨て、かなぐり捨てたれば、龍田山のもみぢの嵐に散るがごとし。なぎさに寄する白波も薄紅にぞなりにける。  
主なき船は風にまかせて、いづくともなくゆられ行く。

(巻十一、早鞆)

文学に見る戦士ヒーローは歴史、宗教、風土、国民性、美意識、文化的嗜好の産物である。世界共通のヒーロー資質に加えて、ウェールズでは「理想の為政者」、「予言の息子」という特徴があり、彼らは過去・現在・未来にまたがる存在だった。日本では「運命の息子」、「美しく滅びた者」という特徴があり、前世からの宿縁に縛られて死んだが、国民のノスタルジーとともに生き続けた。そうしたイメージの形成と伝承には、上に見てきたとおり、詩人や語部が少なからず貢献してきた。国民がそのイメージに双方向的な影響を与えたことは言うまでもない。価値観や運命観や死生観の背後には、土俗的な再来思想や御霊信仰も見え隠れする。現代のグローバルな文明の交流を経ても、長く受け継がれた個々の文明の本質や国民のメンタリティはそう変わるものではない。ウェールズと日本の戦士ヒーローはこれからも、新しい解釈やさまざまな表現形態を与えられつつ、生き続けることだろう。

#### [注]

<sup>i</sup> Dr. Hunter はウェールズ中世詩が専門であるが、タリエシン誌の共同編集やアメリカに移住したウェールズ人の研究でも知られる。後者についての著書 *Cymry Rhyfel Cartre America* は2004年の The Book of the Year に選ばれ、そのBBC ドキュメンタリーは Gwyn Alf Williams BAFTA Award を受賞。それらの業績で2005年には *Gorsedd y Beirdd* の名誉ドルイドに選ばれた。なお、Dr. Hunter がハーヴァード大学に出講された半年間は、現ウェールズ学科長 Dr. Peredur Lynch の指導を仰ぐという幸運にも恵まれた。Dr. Lynch は生粋のウェールズ人で、strict metre の詩人としても高名である。

<sup>ii</sup> 尾島庄太郎はケルトと日本の自然観や汎神論に類似を見る。『イギリス文学と詩的想像：ケルト民族の稟質の展開』(1966)、特に第三編「ウェールズのケルト文学」pp.329-529.

<sup>iii</sup> 騎士道は9-10世紀に封建制が確立した頃生まれたキリスト教的な行動倫理。英雄時代(Heroic Age)の武勇、忠誠、名誉、寛容に加えて、敬神、克己、礼節、慈悲、婦人への献身などが加わった。アーサー王の騎士団や円卓はもっと古いフィアナ戦士団を起源とするという説もあり、Ellis, P. B., (1992) の Knights, Fianna, Red Branch の項を参照されたい。騎士道全般については Uden, G. *A Dictionary of Chivalry* (1968); Barber, R. W. *The Reign of Chivalry* (1980); Keen, M. *Chivalry* (1984) 等がある。

新渡戸稲造によれば、武士道の深淵は封建制度が生れるずっと前から存在したという。すなわち、神道は祖先崇拜や忠孝を教え、仏教はすべてを運命に任せる平常の感覚を教え、儒教は仁、義、礼、智、信を教え、それらが融合した道德体系であったとする。新渡戸『武士道』(1998)。

勝部真長によれば武士道は3つに大別される：古典的武士道（鎌倉時代の御恩と奉公、江戸時代の葉隠思想）、理論的武士道（人倫の道の実現、例えば『忠臣蔵』）、明治武士道（近代的・国民的な道徳体系）。勝部「武士道の三つのタイプ」、『日本の心』（1987）。1900年出版の新渡戸論を問い直すものとしては、菅野覚明『武士道の逆襲』（2004）、池上英子『名誉と順応：サムライ精神の歴史社会学』（2000）などが一読に値する。

iv ウェールズでは、守護聖人 Dewi Sant を始めとする宗教ヒーローが多くの聖人伝に記録されている。この伝統は近代にも受け継がれ *The Dictionary of Welsh Biography* では100人以上の非国教徒聖職者がヒーロー的に扱われている。グリンドゥールの時代はまた、多くのアウトロー・ヒーローがいた時代でもあり、詩にも歌われている。(Rees, E. A. 2001)。ルネサンス期の行動的啓蒙家は文化ヒーローであり、Emyr Humphreys, John Davies, Alun Roberts らは、ウェールズ的な民衆ヒーロー (folk hero) として、産業革命以後の労働運動の闘士や平和運動の指導者を挙げている。

v 人類学者梅棹忠雄によれば、「日本人は、なんでもかでも、美の尺度ではかろうとしているのではないか。芸術的感動をもって行動の原理としていることが多いのではないか。宗教や科学の追及も一種の美的体験として受けとめられているふしがある(要約藤沢)」『文明の生態史観』（1967:35）。

vi 大岡信によれば、「石田英一郎は日本文化の性格を規定した二大要因として、日本の置かれた地理歴史的条件の特殊性と、本来の意味での牧畜生活の欠如した植物的な自然性とをあげている」『大岡信著作集8』（1977:105）。

vii 『マビノギオン』のアーサーは宮廷で争いごとを裁定し、また『ブリタニア列王史 *Historia Regum Britanniae*』では、将兵の前で大演説をしている (Thorpe:232-33)。

viii 意外にも、手元の倉野憲司校注『古事記』（岩波文庫 1966）に、この文面はない。Wheeler の英訳書は1952年の出版で、底本については未確認。彼は駐日米国大使だったことがあり、稀本にアクセスできたのかもしれない。

ix Griffiths, M. E. (1937) は優れた予言詩研究だが、近年は次のような論考も注目されている。Gruffydd, G. F. (2003、国際ケルト学会)；Jenkins, M.B. (1990) ケンブリッジ大学、博士論文。

x ブランウェンやプレデリ母子の例に見るように、侮蔑 (*sarhad*) は許しがたいことだった。ウェールズ法には、侮蔑の償いについて詳細な規定がある。Jenkins, David (1986) および Ellis, T. P. (1926)。

xi Davies はこの反乱を、時代の変化や人心を読み、自分の年来の夢を実現しようとしたとみる (Davies, R. R. 1977:150)。シェークスピアはグリンドゥールを神秘的で hot-blooded な人物としたが、Dr. Lynch は彼を level-headed な指導者とする (Lynch, P. 2002)。

xii *The Welsh Mail Magazine*, Sept. 16, 2000 によれば、この政治理念のゆえに、2000年に行われた「過去1000年間に（ヨーロッパに）影響を与えた人物」という欧州の政治家・学者を対象としたアンケートで、グリンドゥールは7位だった。

xiii これは聖婚とも思われ、ケルト人の王が土地の女神と結婚して統治権 (sovereignty) を得るという考えに通じる。Wheeler, P. (1952:xxxv-xxxvi) によれば、一部の欧米日本学者は、性に関するオープンな記述のため、日本神話を卑俗と評している。人類学者 Ruth Benedict は、「(日本人にとって) 肉体的快楽の追求という人間的感情は自然なこと。性が人生において [義理や孝行や忠誠などの徳目に比して] 低い地位を占めている限り、快楽は少しも悪くない」(要約、藤沢) と説明している。Benedict, R. (1980:183)。

xiv 魔法を使う王マースが、罪の子らに洗礼を施している。ケルト的魔女が登場する一方で、

司祭も登場する。一騎打ちに勝った騎士は、洗礼やアーサーへの恭順を条件に相手を許している。ウェールズ法による裁定や、職人や召使の生活が散見される。

xv 類似の論考が O'brien, M. (1911) に見られる。

xvi 二つの詩の英訳および解説については参考文献中の Ford, P. K. (1974; 1979; 1999) および Rowland, J. (1990; 1994) 参照。同時代のアングロサクソンの詩や散文にも、運命と自由意志の問題、神の摂理と個人の責任を扱ったものがある (Trahern Jr, J. B., 1991)。

xvii Wheeler 訳『古事記』には、次のような記述がある。

When the Sovereign heard of his death, he could not sleep, and food was not sweet to his taste. He lamented the loss, saying "Oh, evil thing that has befallen Us!" and he ordered the building of a magnificent tomb for Takeru.

疎んじた息子の死を悲しむ一方で、都への望郷に駆られた霊が戻ってくることを恐れ、鎮魂を命じたとも読める。『平家物語』では、平家滅亡後の大地震を平家の怨霊による祟りとし、能『船弁慶』では、義経が知盛の亡霊に悩まされている。中世人にとって、元寇は(ジンギスカン伝説と相まって)義経迫害に対する鎌倉への天誅と見えたかもしれない。

xviii 日本に予言がなかった訳ではない。ブルトウスへの夢のお告げを思わせる神功皇后への夢のお告げ(『古事記』中つ巻、仲哀天皇)がある。『平家物語』にも、吉凶を占って決定を下したり人相見が運勢を読む場面や、聖徳太子の『未来記』についての挿話がある。

xix ここでいう楽人はハーブの弾き語りをしたパフォーマーであろうか。詩人と語部の関係については諸説があり、Ford, P. K. (1975-6:152-62); Parry, T. (1955:69), Mac Cana (1975: 7-8); Roberts, B.F. (1992:81-82)らを参照されたい。日本の語りについては兵藤裕己『平家物語——語りと原態』、同『太平記 <よみ>の可能性』が興味深い。

xx 社会の変動につれ権威が蔑ろにされ秩序が乱れた時代であったこと、フランス風宮廷恋愛による道徳問題があったことを反映しているかもしれない。

xxi 中国の中央集権制に倣った国軍(農民を徴兵し、歩兵と射手から成る)が日本に誕生したのは685年のことである。8世紀には自前の馬に乗ったプロフェッショナルな戦士が地方に出現し、封建制度の発展とともに、12世紀には武士階級として勢力を持つに至った(池上英子、2000:51)。新興の彼らは名誉文化を打ち出して自らのアイデンティティとしつつ、王朝文化にも憧れと敬意を抱いていた。

xxii 『万葉集』(成立770年。しかし400年頃から600年頃の歌を収集)から『新続古今集』(1439。最後の勅撰集)までに相当する。この間に21の勅撰和歌集が編纂されている。宮廷文化については第1章 Courtly and Human Values および Morris, I. (1994) を参照。

xxiii 柿本人麻呂の長歌(巻二・199-201)は149行と長く、壬申の乱で英雄的な戦死をとげた高市皇子を悼んでいる。

xxiv 武士は主君から所領を与えられ、その代償として戦時には命をかけて軍務に励んだ(御恩と奉公)。こうした君臣関係と封建制度に基づく秩序を維持するために名誉文化が生まれ、それは武士にとって内面的にも外面的にも必要であった(池上『名誉と順応』2000)。現実的な利害を内包したこの主従関係は、ヨーロッパの領主と騎士の間に見られる保護と忠誠の相互契約にきわめて近い。『マビノギオン』では、ペレディルとキルフッフがアーサーの騎士になるべく努力している。

xxv 次のような戦時中にもはやされた歌も含まれる。

神風の 伊勢の海の / 大石に 這ひ廻 (もとほ) ろふ  
細螺 (しただみ) い這ひ廻り 撃ちてし止まむ (中巻、神武東征、征旅の歌)

#### 主要参考文献

Bowra, Cecil Maurice (1964) *Heroic Poetry*, London: Macmillan.

Bromwich, Rachel, et al., ed. (1999) *The Arthur of the Welsh: The Arthurian Legend in*



- Medieval Welsh Literature*, Cardiff: UWP.  
ed. (1978) *Trioedd Ynys Prydein*, Cardiff: UWP.  
(1982) *Armes Prydein: the prophecy of Britain from the Book of Taliesin*, ed. and annotated by Ifor Williams, English version by Rachel Bromwich, Dublin: the Dublin Institute for Advanced Studies.
- Carr, A.D. (1991) *Owen of Wales: the End of the House of Gwynedd*, Cardiff: UWP.
- Chadwick, H. Munro (1912) *The Heroic Age*, Cambridge: UP.
- Chadwick, Nora (1976) *The British Heroic Age: The Welsh and the Men of the North*, Cardiff: UWP.  
(1997) *The Celts*, London: Penguin.
- Campbell, Joseph (1956) *The Hero with a Thousand Faces*, New York: Meridian Books.
- Charles-Edwards (1999) 'The Arthur of History', *The Arthur of the Welsh: The Arthurian Legend in Medieval Welsh Literature*, ed. R. Bromwich et al., Cardiff: UWP, pp.15-32.  
(2000) 'Food, Drink and Clothing with Laws of Court', *The Welsh King and His Court*, Cardiff: UWP, pp.319-346.
- Clancy, Joseph P., trans. (2003) *Medieval Welsh Poems*, Dublin: Four Courts.  
trans. (1965) *Medieval Welsh Lyrics*, New York:
- Coe, Jon B. and Simon Young (1995) *The Celtic Sources for the Arthurian Legend*, Felinfach: Llanerch
- Davies, John (1993) *A History of Wales*, London: Penguin.
- Davies, R. R. (1997) *The Revolt of Owain Glyn Dŵr*, Oxford: UP.
- Davies, Sioned (1993) *The Four Branches of the Mabinogi: Pedeir Keinc y Mabinogi*, Llandysul: Gomer.  
(1998) 'Written text as performance: the implications for Middle Welsh prose narrative', *Literacy in Medieval Celtic Societies*, ed. Huw Pryce, Cambridge: UP, pp.133-148.
- Ellis, Peter Berresford (1992) *Dictionary of Celtic Mythology*, London: Constable.
- Ellis, T.P. (1926) *Welsh Tribal Law & Custom in the Middle Ages*, Oxford: UP.
- Evans, R. Wallis (1997) 'Prophetic Poetry', *A Guide to Welsh Literature*, Vol.2, ed. A.O.H. Jarman and G.R. Hughes, Cardiff: UWP, , pp.256-74.
- Ford, Patrick K. et al. (1983) *Celtic Folklore and Christianity* (Los Angeles: University of California.  
(1999) Introd. and trans. *The Celtic Poets: Songs and Tales from Early Ireland and Wales*, Belmont: Ford and Bailie.  
(2003) 'Aspects of the Performance of Poetry in Medieval Wales', an unpublished paper for Bangor University Foundation Lecture.  
(1974) Introd., text and trans. *The Poetry of Llywarch Hen*, Berkley: University of California.  
(1975-6) 'The Poet as Cyfarwydd in Early Welsh Tradition', *Studia Celtica*, X/XI, 152-62.  
(1979) Trans. *The Mabinogi and other medieval Welsh tales*, Berkley: University of California Press.
- Freeman, Philip (2002) *War, Women, and Druids: Eyewitness Reports and Early Accounts of the Ancient Celts*, Austin: Texas UP.
- Gantz, Jeffery (1976) *The Mabinogion*, London: Penguin.
- Godden, M, with M. Laptidge (1991) *The Cambridge Companion to Old English*

- Literature*, Cambridge: UP.
- Green, Miranda J. (1986) *The Gods of the Celts*, London: British Museum Press.
- Griffiths, Margaret Enid (1937) *Early Vaticination in Welsh*, Cardiff: UWP.
- Gruffydd, Gruffydd Fôn (August 2003) 'Rhai Agweddau Ar Y Canu Darogan Diweddar A Briodolir I Daliesin', an unpublished paper delivered at the International Conference of Celtic Studies at University of Wales Aberystwyth.
- Gwyndaf, Robin (1987-88) *The Welsh Folk Narrative Tradition: Continuity and Adaptation*, reprinted from *Folk Life*, Vol.26.
- Hatto, A.T. (1980-89) ed. *Tradition of Heroic and Epic Poetry*, London: Modern Humanities Research Association.
- Henken, Elissa R. (1996) *National Redeemer: Owain Glyndŵr in Welsh Tradition*, Cardiff: UWP.
- Humphrey, Emyr (2000) *The Taliesin Tradition: a quest for the Welsh identity*, Brigend: seren (Poetry Wales Press)
- Jackson, Kenneth (1935) *Early Celtic Nature Poetry*, Cambridge: UP.  
(1969) Trans. *The Gododdin: the oldest Scottish poem*, Edinburgh: UP.
- Jarman, A.O.H. (1990) Trans. *Aneirin: Y Gododdin*, Llandysul: Gomer.  
(1967) 'The heroic ideal in early Welsh poetry', *Beiträge zur Indogermanistik und Keltologi.*, Julius Pokorny zum 80. Geburtstag gewidmet. Hrsg. Von Wolfgang Meid, Innsbruck, pp.193-211.  
(1991) 'The Merlin Legend and the Welsh Tradition of Prophecy', *The Arthur of the Welsh*, ed. R. Bromwich et al., Cardiff: UWP, pp.117-145.
- Jarman, A.O.H. and G.R. Hughes (1992) ed. *A Guide to Welsh Literature*, Vol.1, Cardiff: UWP.  
(1997) revised by D. Johnston, *A Guide to Welsh Literature*, Vol.2, Cardiff: UWP.
- Jenkins, Dafydd (1986) trans. and ed. *The Law of Hywel Dda: Law Texts from Medieval Wales*, Llandysul: Gomer.  
(2000) 'Bardd Teulu and Pencerdd', *The Welsh King and his Court*, ed. T. Charles-Edwards et al., Cardiff: UWP, pp.142-66.
- Jenkins, M.B. (1990) 'Aspects of the Welsh Prophetic Verse Tradition in the Middle Ages', PhD thesis, Cambridge University.
- Johnston, Dafydd, (1993) trans. *Iolo Goch: Poems*, Llandysul: Gomer.
- Jones, Bedwyr Lewis (1975) *The Welsh Arthur*, Cardiff: UWP.  
(1983) 'Gladly would we have a tale', *Loughborough '83*, Proceedings of the 16th International Seminar on Children's Literature, pp.23-32.
- Jones, Glyn, with T.J. Morgan (1994) ed. J. Rowland, *The Story of Heledd*, Newton: Gwasg
- Jones, Gwyn (1949) *The Mabinogion*, trans. with Thomas Jones, London: Everyman's Library.  
(1972) *Kings Beasts and Heroes*, Oxford: UP.  
(1972) trans. *The Oxford Book of Welsh Verse* by Thomas Parry, Oxford: UP.
- Klausner, David (1999) trans. 'The Statute of Gruffudd ap Cynan', *Welsh Music History 1999*, Vol.3. Cardiff: UWP, pp. 292-98.
- Koch, John T. and John Carey (2003) ed. *The Celtic Heroic Age: Literary Sources for Ancient Celtic Europe and Early Ireland & Wales*, Aberystwyth: Celtic Studies Publications.
- Lewis, Ceri W. (1992) 'The Court Poets: Their Function, Status and Craft', *A Guide to Welsh Literature*, Vol.1, ed. A.O.H. Jarman and G.R. Hughes, Cardiff: UWP,

- pp.123-56.  
(1997) 'The Content of Poetry and the Crisis in the Bardic Tradition', *A Guide to Welsh Literature*, vol.2, ed. A.O.H. Jarman and G.R. Hughes, revised by D. Johnston, Cardiff: UWP, pp.72-94.
- Lloyd, J. E. (1931) *Owen Glendower*, Oxford: Clarendon Press.
- Loomis, R.S. (1956) *Wales and Arthurian Legend*, Cardiff: UWP.  
(1969) *Arthurian Literature in the Middle Ages*, Oxford: Clarendon Press.
- Lynch, Peredur (2002) 'Let everyone beware of his neighbour: vaticination and National identity in medieval Wales', the Conference of the North American Association for the Study of Welsh Culture and History.  
(2000) 'Court Poetry, Power and Politics', *The Welsh King and his Court*, ed. T.M. Charles-Edwards et al., Cardiff: UWP, pp.167-90.
- Mac Cana, Proinsias (1975) *Celtic Mythology*, New York: Hamlyn.  
(1977) *The Mabinogi*, Writers of Wales Series, Cardiff: UWP.
- McKenna, Catherine A. (1991) *The Medieval Welsh Religious Lyric: poems of the Gogynfeirdd, 1137-1282*, Massachusetts: Ford and Bailie.
- Matonis, A.T.E. (1978) 'Traditions of Panegyric in Welsh Poetry: The Heroic and the Chivalric', *Speculum* 53, pp. 667-87.
- Morris, John (1980) ed. and trans. *British history and the Welsh annals / Nennius*, London: Phillimore.
- O'brien, M. (1911) 'Heroic values and Christian ethics', ed. M. Goddan and M. Lapidge, *The Cambridge Companion to Old English Literature*, Cambridge: UP.
- Parry, Thomas (1955) *A History of Welsh Literature*, trans. H. Idris. Bell, Oxford: UP.
- Pennar, Meirion (1989) trans. with introduction, *The Black Book of Carmarthen* Lampeter: Llanerch.
- Powys, John Cowper (2002) *Owen Glendower*, Oxfordshire: Walcot Books.
- Rees, David (1997) *The Son of Prophecy: Henry Tudor's Road to Bosworth*, Ruthin: John Jones.
- Rees, E.A (2001) *Welsh Outlaws and Bandits: Political Rebellion and Lawlessness in Wales, 1400-1603*, Birmingham: Caterwen Press.
- Roberts, Alun (2002) *Welsh National Heroes*, Ceredigion: Y Lolfa.
- Roberts, Brynley F. (1992) *Studies on Middle Welsh Literature*, Welsh Studies Vol.5, Lampeter: Edwin Mellen Press.
- Rowland, Jenny (1990) ed. and trans. *Early Welsh Saga Poetry: a study and edition of the englynion*, Cambridge: UP  
Shakespeare, William (1960) *King Henry IV*, ed. A.R. Humphreys, London: Arden.
- Sims-Williams, Patrick (1983) 'Gildas and the Anglo-Saxons', *Cambridge Medieval Celtic Studies*, vi, 1-30.
- Shakespeare, William (1960) *King Henry IV*, ed. A.R. Humphreys, London: Arden
- Skidmore, Ivan (1978) *Owain Glyndŵr, Prince of Wales*, Swansea: Christopher Davies.
- Stephens, Meic (1998) ed. *The New Companion to the Literature of Wales*, Cardiff: UWP.
- Thomas, Gwyn (1968) *Eisteddfodau Caerwys*, Cardiff: UWP.
- Thorpe, Lewis (1976) Trans. Geoffrey of Monmouth's *The History of the Kings of Britain*, London: Penguin.  
(1978) Trans. Gerald of Wales' *The Journey through Wales and the Description of Wales*, London: Penguin
- Vries, Jan de (1963) *Heroic Song and Heroic Legend*, trans. B.J. Timmer, Oxford: UP.

- Wade-Evans, Arthur Wade (1956) *The Emergence of England and Wales*, Belgium: De Meester.
- Williams, G. Aled (1986) 'The Bardic Road to Bosworth', *Transactions of the Honourable Society of the Cymmrodorion*, 7-31.
- Williams, G. J. and Jones, E. J. (1934) ed. *Gramadegau'r Penceirddiaid*, Cardiff: UWP.
- Williams, Glanmor (1979) *Religion, Language and Nationality in Wales*, Cardiff: UWP.
- (1993) *Owain Glyndŵr*, Cardiff: UWP.
- Williams, Gwyn (1992) *An Introduction to Welsh Literature*, Cardiff: UWP.
- Williams, Gwyn A. (1959) 'Owain Glyn Dŵr', *Wales through the Ages*, ed. A.J. Roderick, Llandybie: Christopher Davies, pp.176-183.
- Williams, Ifor (1933) *The Poems of Llywarch Hen*, reprinted from *The Proceedings of the British Academy*, Vol. XVIII, London: Humphrey Milford and Amen House E.C., The Sir John Rhys Memorial Lecture.
- Williams, J.E. Caerwyn, (1991) *The Celtic Bard*, Mychynlleth: Tabernacle Trust.
- 100 Welsh Heroes* (2004), ed. Culturenet Cymru Ltd. Aberystwyth: Culturenet Cymru Ltd.
- 日本に関する参考文献
- Japanese Noh Drama*, 3 vols. Tokyo: Nippon Gakujutsu Shinkokai (1956-1960).
- Keene, Donald (1987) *Japanese Literature*, Tokyo: C.E. Tuttle.
- (1998) ed. *Anthology of Japanese Literature: from the Earliest Era to the Mid-Nineteenth*, New York: UNESCO Collection of Representative Works.
- Manyō-shū* as *The Manyōshū: The Nippon Gakujutsu Shinkokai Translation of One Thousand Poems*, Tokyo (1940).
- McCullough, Helen Craig (1971) trans. *Yōshitsune* [Its original title is *Gikei-ki* or *Yōshitsune-ki*], Stanford: UP.
- (1988) trans. *The Tale of the Heike*, Stanford: UP.
- Miner, Earl (1968) *An Introduction to Japanese Court Poetry*, Stanford: UP.
- (1985) ed. with Hiroko Odagiri and Robert E. Morrell, *The Princeton Companion to Classical Japanese Literature*, Princeton: UP.
- Morris, Ivan (1975) *The Nobility of Failure: Tragic Heroes in the History of Japan*, London: Secker & Warbury.
- (1994) *The World of the Shining Prince: Court Life in Ancient Japan*, Tokyo: Kodansha.
- Sanari Kentaro (1953) *Yōkyoku taikan*, Tokyo: Meiji Shoin.
- Scott, A.C. (1956) *The Kabuki Theatre of Japan*, London: Allen and Unwin.
- Torao, Toshiya and D. M. Brown (1987) ed. *Chronology of Japan*, trans. Nobuhiko Akimoto, Tokyo: BII.
- The Tale of the Heike*, trans. Helen Craig McCullough, Stanford: UP (1988).
- Other translations:
1. Bruce Tsuchida and Hiroshi Kitagawa (Tokyo UP, 1977).
  2. A.L. Sadler (Tokyo: C. E. Tuttle, 1971).
- Japanese Noh Drama* Nippon Gakujutsu Shinkōkai (Tokyo, 1960).
- Wheeler, Post (1952) trans. *The Sacred Scriptures of the Japanese* [Kojiki], New York: Henry Schuman.
- Other translations:
1. *Kojiki: A Record of Ancient Matters*, trans. Donald Philippi, Tokyo University Press (1969).

2. *Kojiki: Records of Ancient Matters*

trans. Bail Hall Chamberlain, Annotation by W.G. Aston *Collected Works of Basil Chamberlain: Major Works, Vol. 5* (Bristol and Tokyo, 2000).

- 日本語による文献 \*は英訳のあるもの
- 池上英子 『名誉と順応：サムライ精神の歴史社会学』森本醇訳 (NTT 出版、2000) \*  
『岩波講座：日本文学史』1巻「万葉の歌人たち」(岩波書店、1995)
- 梅棹忠夫 『文明の生態史観』(中央公論社、1967) \*
- 尾島庄太郎 『イギリス文学と詩的想像：ケルト民族の稟質の展開』(北星堂書店、1966)
- 大岡信 『大岡信著作集8』(青土社、1977)  
「詩の伝統に見る日本の心」、『日本の心』(丸善、1987) \*
- 加藤周一 『日本文学序説 上』(筑摩書房、1988)
- 勝部真長 「武士道の三つのタイプ」、『日本の心』(丸善、1987) \*
- 観世左近 『安宅 (観世流大成版)』(榎書店、1993)  
『古今和歌集』 佐伯梅友校注 (岩波書店、2004)  
『古事記』 倉野憲司校注 (岩波書店、1967)  
『新古今和歌集』 日本文学全集、第1巻 (河出書房、1968).
- 新渡戸稲造 『武士道 BUSHIDO』須知徳平訳 (講談社インターナショナル、1998) \*  
『日本の心：文化・伝統と現代』 新日本製鉄広報企画室 (丸善、1987) \*  
『日本文学史』 秋山虔、三好行雄編著 (文英堂、1985)
- 野田浩子 「詞人・宮廷歌人論」国文学、第46巻9号 (至文堂、1981)  
『平治物語』 日本文学全集、第5巻 (河出書房、1967)  
『平家物語』(上、中、下) 新潮日本古典集成、水原一校注 (新潮社、1981)  
『万葉集』 日本文学全集、第1巻 (河出書房、1968)  
『山梨の昔ばなし』 河野伸江 (官井商会、不明)
- ルース・ベネディクト 『菊と刀：日本文化の型』(長谷川松治訳、世界思想社、1965) \*  
(完)